

## 論文の内容の要旨

### 戦前・戦後日本における知識人論と文学史についての研究

#### ——社会運動と文学運動との関連を中心に——

木村 政樹

本論は、戦前・戦後日本における知識人論と文学史について、社会運動と文学運動との関連を中心に研究したものである。序章と終章を除いて、全体は四部構成となっている。

序章では問題設定を行ない、本論の方法と対象を明確にした。まず、丸山真男の知識人論を批判的に検討することで、知識人関連語群を検討することの意義について論じた。次いで、知識人関連語群についての先行論を整理したうえで、本論の課題が知識人論と文学史の接点に着目しながら考察することにあることを示した。また、本論で扱う対象を捉えるために、エンツォ・トラヴェルソが用いたハンナ・アーレントの「隠された伝統」という概念を導入した。そして、次章以降論じる対象を社会運動と文学運動の文脈に位置づけながら、本論の見取り図を提示した。最後に、本論で用いる文学史概念について補足を行なった。

第一部では、初期社会主義と文学の関係を問題化した。まず第一章において、知識人論と文学史について、ロシア文学受容と大逆事件という観点から考察した。はじめに、知識人論としてのロシア文学史が、明治期から大正期にかけて受容されていたことを示した。なかでも、チェーホフがインテリゲンツィアを描く作家として理解されていたことを明らかにした。他方で、雑誌『近代思想』などの社会主義関連のジャーナリズムでも知識人関連語群が用いられていたこと、それが文学イメージと接点をもっていたことについても論じた。最後に、大逆事件の弁護人かつ作家であった平出修の知識人関連語群の用例の検討を通して、言論弾圧に対する抵抗を語るこ

とと、雑誌『太陽』の読者を「知識階級」とみなすことが結び付いていたことを論じた。

第二章では、堺利彦が発刊した雑誌『月刊新社会』を中心に、「知識階級」概念と文学の関係について考察した。『月刊新社会』は、大逆事件以降の逼迫した言論状況において、社会主義に関する知識を普及する重要なメディアであった。同誌で堺は、「中間」的な階級に対して、期待すると同時に批判を試みていた。それは同時代の文学者を批判するための論理を形成した。「知識階級」論もまた、こうした論調とともに展開された。『月刊新社会』は、社会主義「冬の時代」において、社会主義者からみた文学の可能性と限界を思考する場として機能したのである。

第二部では、有島武郎と「知識階級」論について論じた。まず、第三章において、有島の「宣言一つ」をめぐる論争が「知識階級」という語の定義を争点としていることを明らかにした。当時、階級問題がジャーナリズムの重大テーマとなっていたものの、階級用語については明確な定義が共有されていたわけではなかった。有島の主張は、こうした状況のなかで展開されたものである。従来、「宣言一つ」論争は不毛だったとみなされてきたが、「知識階級」という語についての理解に着目したとき、有島の主張が対話のなかで更新されていったことがわかった。

第四章では、有島の後期評論をアナ・ボル提携という文脈に置き直して考察した。従来、有島の思想的立場はアナキストに近いものとみなされてきた。だが、その際、ボリシェヴィキ批判の側面が論じられることはあっても、当時の運動でアナ・ボル提携が試みられていたことについての踏み込んだ考察はなされてこなかった。本章では、労働社のメンバーであった吉田一の思想と運動との関係に注目して分析することで、有島が次第に見解を変化させていき、アナ・ボル提携という難問に関わる思考を展開していたことを明らかにした。

第五章では、有島武郎とその周辺のマルクス主義の論調を中心に考察した。まず、「宣言一つ」論争と同時期に展開された山川均の方向転換論が、「無産階級」概念を実体化しようとする志向があったことを、有島の「第四階級」概念と対照することで分析した。次に、福本和夫の「無産階級」論が階級概念の臨界を開示するものであり、その点で有島と共通しつつも、最終的に両者の論理がすれ違っていくさまを考察した。最後に、藤森成吉の「犠牲」という戯曲とその周辺について考察することで、ロシア文学的なイメージと有島が結び付けられつつ、文芸領域において継承されようとしたことについて論じた。

第三部においては、プロレタリア文学運動と文学史の関係を問題とした。第六章では、宮本顕治の「敗北」の文学」を分析した。この時期、円本ブームなどによって文学関連情報が整備されることにより、文学研究的な機運が作り出された。また、一九二七年の芥川龍之介の死は大きな反響を引き起こした。芥川について語ることが社会現象化し、ジャーナリズムでは「文壇」の自己象徴化が起こった。こうした状況を背景に、宮本は「芥川龍之介」を左派陣営に篡奪し位置づけようと試みた。それは、ロシア文学の知を前提としながら、文学的な知識をマルクス主義の文脈へと接続し変換しようとする営みでもあった。

第七章では、平野謙が荒木信五の筆名で書いた「プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアの道」を読解した。平野はこの論考を発表した頃、プロレタリア科学研究所芸術学研究会と明治文学談話会に属していたとされている。一九三二年の日本プロレタリア文化聯盟（コップ）弾圧以

降の厳しい情勢において、文学研究の場そのものが追い詰められていくなか、平野は唐木順三の新刊の紹介というかたちをとりながら、芥川龍之介の乗り越えという問題を改めて思考した。この問題は第六章で検討したように、宮本が抱えていた問いでもあるが、平野はここで一九三二年の宮本を批判してもいる。プロレタリア文学運動の批判的継承のあり方を模索しながら、平野が文学史という実践をリレーしようと試みたことを論じた。

第八章では、一九三五年の中村光夫の批評を考察した。中村は、「封建文学」と「ロマン主義」というふたつの概念を導入して、「体系」的な文学論を構想した。それは、当時翻訳されていたジェルジ・ルカーチの小説論と共通した論理構造をもつものであった。中村は「講座派」マルクス主義を強く意識しつつ、それを議論の手がかりとしてみずからの文学論を展開しようとしており、その点においてプロレタリア作家とのコミュニケーションの回路を開いていた。中村の主張に対しては中野重治の反論があったが、両者の対立は社会認識の相違に起因するものというより、文学論の特質が異なっていたためであった。

第四部では、『近代文学』同人の主張や知的背景を検討することで、文学史の構造やそのリテラシーの位相を明らかにすることを試みた。まず第九章では、戦時期の荒正人のロシア文学理解について論じた。当時、荒は小田切秀雄、佐々木基一とともにロシア文学に関する読書会を行っていた。荒の批評には、ロシア文学的な知やルカーチの影響がみてとれる。荒の国民文学論は、二葉亭四迷の「浮雲」を「余計者」という観点から評価するものであったが、それもまたロシア文学が議論の参照先としてあった。戦後になって荒は、代表的な知識人論の論者として活動することになるが、それはロシア文学を介して日本文学について考えるというリテラシーと不可分なものであったといえる。

第十章では、平野謙の「昭和文学のふたつの論争」を読解した。戦後、平野は文学史家として大成したが、他方で平野の文学史観は、繰り返し批判を受けてきた。ここでは平野の描いた文学史を、先行研究ではなく研究対象として捉え、その実践性を浮き彫りにすることを目指した。特に、中野重治との戦後「政治と文学」論争での争点が文学史をめぐるものであったことをふまえながら、現在の論争的課題に接続しようとする平野の戦略に焦点をあてて考察した。同論考で平野は、文学に関連する概念の曖昧さを問題化することによって、文学史の書き換えを対話的に思考しようとしていたことを示した。

第十一章では、本多秋五が戦後十年弱のあいだに展開したプロレタリア文学論を考察した。本多は戦前からプロレタリア科学研究所に属し文学史研究への志向をもっており、戦後に入るとプロレタリア文学の再検討を行なった。一九四七年の宮本百合子論では、平和革命路線を意識しつつ、小林秀雄の「私小説論」を参照しながら、百合子を軸とした文学史を構成した。このあと本多は、中村光夫の「風俗小説論」の影響を受けながら、『白樺』派から百合子の線を朝鮮戦争下の「知識人」の問題とも関連させて提出した。続けて発表された転向文学論では、小田切秀雄の「頽廢の根源について」をふまえることで、戦前のプロレタリア文学運動そのものの総括を行なった。以上の変化は、本多自身によって「後退」の過程として捉えられることとなる。だが、それは民主主義文学運動からの撤退ではなく、状況に応じて文学史を再構築することによる実

践的介入としてあったことを論じた。

終章では、以上の考察をまとめつつ、「隠された伝統」としての知識人論と文学史の歴史的展開を記述した。知識人論としての文学史は、言論弾圧に抗し活動拠点を確保しながら、文学とはなにかについて考える営みとしてあった。それは絶え間なく変化する状況に応じつつ、実践的に構成される言説であることを明らかにした。